

## 絵本に描かれた移行対象 ～子どもの育ちにとっての移行対象を考える～

石川 由美子<sup>1</sup>

石川 隆<sup>2</sup>

子どもは、自己と他者という関係性の中で、自己を意識化していく。この研究ノートでは、乳児期早期から自-他の関係性の中で生じる葛藤を、乗り越えるための心理的な道具としての移行対象を考えてみたい。移行対象を明確に描いている2冊の絵本(「よるくまクリスマスまえのよる」、「クマの名前は日曜日」)について、1)自己-他者をつなぐ媒介物としての移行対象の観点、2)絵本で描かれる移行対象と子どもの観点、の2点から子どもの育ちに対する移行対象の意味について検討を試みた。その結果、母親の象徴としての移行対象という従来の移行対象に対する捉え方の一方で、他者および文化的環境とのやりとりで生じる、子どもの様々な心理的危機に対して、常に子どもの側に立ち、子どもに寄り添いながら、子どもの葛藤を解消する心理的な道具としての移行対象の視座も見えてきた。この視座は、今後の発達研究や保育、教育に活かせる視点と考えられる。

Keywords : 移行対象、絵本、自己の意識化、自己-他者関係、子どもの育ち

### 1. はじめに

「Puff, The Magic Dragon」というアメリカのフォークソングがある。ジャッキー・ペーパーと魔法のドラゴン、パフは、いつでもどこでもいっしょで楽しく遊んでいたが、大人になったジャッキー・ペーパーはパフのもとを去ってしまう。この歌を聴くたびに何故だか悲しくなった。それはつい最近まで続いていた。置き去りになったパフの側の悲しさに共感してしまうためだろうか。もしかしたら自分も、自分にとって大切な何かを忘れ、その何かをどこかに置き去りにしてしまっているのではないかと、不安になるせいであろうか？

ともかくにもこのパフこそが、ウイニコットによって紹介された「移行対象」と言われるものだと思うようになったのは、大学で学びはじめてからである。ただ、ここに来て、少しだけこの歌に対して疑問を持つようになった。

ジャッキー・ペーパーと夢中で遊んだパフは、

本当に悲しみに暮れて洞窟にこもってしまったのか、という疑問である。もしかしたら、ジャッキー・ペーパーにとっての真のドラゴンとなり、ジャッキー・ペーパーの心の世界を彼と一緒に旅をしているのではないか。時に、彼の分身となり、時に彼の信頼に値する旅の仲間となって彼の生活に寄り添っているのではないのだろうか、そんなふうにも思えてくるのである。

乳幼児が特別の愛着を寄せる対象に「移行対象」と名付け、概念化したのは、イギリスの小児科医ウイニコットである。また移行対象は、子どもにとって母親のシンボルでもあり、乳幼児の情緒に安定をもたらすものであるとした(Winnicott, 1953)。

井原(2011)は、ウイニコットの理論から、移行対象の特徴を次のようにまとめている。1)子どもは、毛布、ぬいぐるみといった移行対象を主観的には生命をもったものとして感じている、2)移行対象が現れてくるのは、母子の分離が問題になっている時で、分離不安に対して防衛手段として移行対象を創造する、3)快樂原則に支配された時期から、現実原則に支配された時期への移行期に現

1. 聖学院大学

2. 宮城学院女子大学

れる。

また、遠藤(1991)は、子どもが移行対象を発現させる契機として、母子間で生じる関係性のストレスについて言及している。これらのことから、移行対象は子どもが生活の中で自己と他者という関係性の分化を意識化し始める過程の中で、その関係性を媒介する三項として生じるものであることは明らかなようである。三項という概念については、皆本(2014)の論文に詳細に論じられている。ここでは、自己-他者という内側と外側の関わりによって弁証法的に生み出される、生活の中での体験としての第三部分(自己でも他者でもなくその中間としての体験)と捉えることとする。

この研究ノートでは、自己と他者という関係性の中で、子どもが自己を意識化していくと捉え、その関係性の葛藤を乗り越えるための心理的な道具としての移行対象を考えてみたい。その素材として、絵本に描かれている移行対象を題材とする。なぜなら、移行対象を描いている絵本作家は、子どもにとってのその対象の存在的意味を心理学的に定義づけすることはなくても、経験的に知っていると思われる大人の代表と考えられるからである。絵本は、読む対象のほとんどが子どもであり、その子どもに目的思考的に何かを伝えたいという動機がある、成熟した大人によって描かれているものがほとんどである。そして、一人の絵本作家のみが描き出しているのではなく、多くの絵本作家によって、時間乗り越え、文化の差乗り越えて残されている文化・歴史的な人工物でもある。そのような文化財の中で描かれている絵本の中には、移行対象が子どもの育ちに与える真の意味が静かに潜んでいると考えられる。

そこで本研究では、移行対象を明確に描いている後述の2冊の絵本(「よるくまクリスマスまえのよる」、「クマの名前は日曜日」)について、1)自己-他者をつなぐ媒介物としての移行対象の観点、2)絵本で描かれる移行対象と子どもの観点、の2点から子どもの育ちに対する移行対象の意味について検討を試みる。

## 2. よるくまクリスマスまえのよる(酒井駒子作、白泉社)

### 1)自己-他者をつなぐ媒介物としての移行対象の観点

白泉社より出版されている酒井駒子作の「よるくまクリスマスまえのよる」は、男の子とお母さんの関係性が物語を支える柱となっていると思われる。今よりもっと幼かった頃と異なり、最近お母さんから叱られてばかりいる自分、このことがクリスマスの前日に男の子に2つの大きな不安をもたらした。一つ目は、「わるいこ」には、サンタさんがこないかもしれないという不安、2つ目は、お母さんは男の子を「わるいこ」と認識し、もはや幼い頃のように抱きしめて(受け入れて)くれないのではないかという不安である。

「よるくま」は、男の子が幼かった時にクリスマスプレゼントでもらったぬいぐるみである。それ以来、男の子の友として常に傍らに寄り添う存在となった。酒井は、絵本の中で、「よるくま」と男の子の関係について、「よるくまは ぼくのともだち よるみたいに くろくって むねには おつきさまが ひかっている とっても かわいい ぼくの ともだち」と表現している(酒井、2006)。見通すことができない闇の中にあること、それは、男の子にとっては上述した2つの不安の中にあることともとれる。そんな不安の中にあっても、暗闇を照らしてくれる、不安を解消してくれる一筋の光明を見出すための存在として「よるくま」は、描かれていると言えそうである。

「よるくまクリスマスまえのよる」という絵本においては、母親と子どもは、常に一体の融合した関係から自-他が分化し始め、母と子の非対称的關係性が生み出す気持ちのズレとその葛藤が物語の背景となっている。そしてその不安を生み出す関係性を男の子が乗り越えるために「よるくま」という移行対象が位置づけられている。

### 2)絵本で描かれる移行対象と子どもの観点

男の子は、前述したようにクリスマスの前日、自分にはサンタさんが来ないのではないかという不安とお母さんが幼い頃のように自分を抱きしめ

て(受け入れて)くれないのではないかという二つの不安を抱えたまま「夢」の世界に入る。男の子の夢の世界の入口をノックし訪ねてきたのが「よるくま」であった。「よるくま」は、クリスマスツリーの飾られた男の子のうちの居間に男の子と一緒に並んで立つ。ここから男の子の夢の世界を旅することになる。この一緒に並んで立つ描写が、本文中にも、そして絵本の裏表紙にもなっている(図1参照)。



図1 男の子とよるくまの構図  
(絵本の構図に基づき石川作成)

一緒に並んで立つこの描写は、「よるくま」が母親側に立つ存在というよりは、男の子の側に立ってどういう時でも男の子と一緒にあることを表すようである。また、男の子よりも小さく描かれている。絵本の中で、男の子は、よるくまにサンタさんのことを教え、クリスマスツリーの飾りを与える。よるくまが自分よりも幼くて男の子が世話してあげる必要がある対象として描かれている。

このような描かれ方から、「よるくま」には男の子にとって以下のような存在としての特徴があるようだ。①お母さんのように自分を叱ったりしない。常に自分に寄り添い自分の感情や思いを一

緒に受け入れてくれる対象。②母さんが自分にしてくれるような世話を、自分がお母さん代わりになってすることができるような対象、である。

男の子の夢の終わり、それは物語の終盤であるが、「よるくま」はよるくまのお母さんに抱きしめられる。男の子もまた幼い頃の自分になって、ぎゅっとお母さんに抱きしめられる。そして、男の子のお母さんの「ママのいるうちに戻っておいで・・・もう心配なんかしないでね」という声が聞こえる。男の子の不安は解消し、またこの絵本を見ているであろう子どもの中の不安も、この場面で見事に解消されて終わるのであろう。

### 3. クマの名前は日曜日(アクセル・ハッケ作、ミハエル・ゾーヴァ絵、岩波書店)

#### 1) 自己-他者をつなぐ媒介物としての移行対象の観点

「クマの名前は日曜日」の冒頭は、「わたしがうんと小さかったころ、なにもしゃべらない小さなクマのぬいぐるみをもっていった。クマの名前は日曜日。」(ハッケ&ゾーヴァ、2001)で始まる。この書き出しから、このお話は、主人公の男の子にとって過去の記憶を遡る話となっていることが分かる。おそらく、日曜日はもうすでに彼の傍らには存在していない。彼の心の中に思い出となってしまわれているのだろう。

なにもしゃべらない、自分からは動くこともない、この「日曜日」を男の子がいかに好きか、「日曜日」に対する男の子の行為で語られる。「日曜日」は、そのような男の子の行為を受け入れ続け、一切の抵抗を示すことがないのである。つまり、「クマの名前は日曜日」においても、「日曜日」は、どんなことがあっても男の子の側に寄り添い、受け入れる存在として描かれていた。しかし、この主人公の男の子は、「よるくまクリスマスまえのよる」の主人公の男の子とは違って、男の子の行為に一切の抵抗を示さず全てを受け入れる対象(「日曜日」)が、常に自分の側に立つものであるのかに疑問を感じ始めている。つまり、自己-他者の関わりの中で生み出した移行対象に対して、

男の子は、さらに弁証法的な吟味を始めたと考えられる。男の子の成長に伴い、移行対象との関係もまた、その対象が常に自分の外側の存在である必要があるのか、あるいは、自分の内に存在してもいいものであるのかの吟味が始まったともいえる。

「クマの名前は日曜日」もまた、自一他という枠組みで考えると、ほとんど男の子と一体であるように描かれている。また、その際、なにもしゃべらない、動かないぬいぐるみという対象物としての「日曜日」が強調されていることに、作者の意図が感じられるものであった。

この物語では、母親との関係性が物語の背景の基盤として重要なものとは位置づけられていなかった。しかも、母親は汚れてしまった「日曜日」を無残にも洗濯機で洗ってしまう、男の子の気持ちを理解しない対象として描かれていた。男の子は、母親をすでに別の人格として認識していると思われる。

このようなことから、「クマの名前は日曜日」では、あくまでも「日曜日」という移行対象が、男の子にとってどのような存在であったのかが、物語の中心となっていることが分かる。また、母親との関係性で考えると、すでに自一他の分化が確立している時期の子どもの物語といえる。すなわち、「クマの名前は日曜日」は、移行対象が子どもにとってどのような存在であるのかに加え、第三項としてある移行対象が、子どもの発達に伴い弁証法的にどのようにその形を変えていくのかを考えるにあたり、多くの示唆を与えてくれるものであるといえる。

## 2) 絵本で描かれる移行対象と子どもの観点

前述したように、物語のはじめは、男の子が「日曜日」がどれほど好きかを表すために、男の子の日曜日に対する行為の記述で始まる。

物語の中盤は、自分の言いなりになってばかりの「日曜日」に男の子が苛立ち、手荒に扱った結果、お母さんによって、「日曜日」が洗濯されてしまう。ゾーヴァがこの場面に描いた洗濯ロープに吊るされた「日曜日」は図2に示した構図と

なっている。

「日曜日」の視線の先に立って、「日曜日」見つめているのは男の子なのだろう。その絵は、ハッケの文章では「しがない、ちびのセンタークマ、こうしてロープにぶらさがっている。まーるで洗濯物のパンツみたい。おいらの泣き声、聞こえな—いの？」(ハッケ、&ゾーヴァ、2001)に対応する。

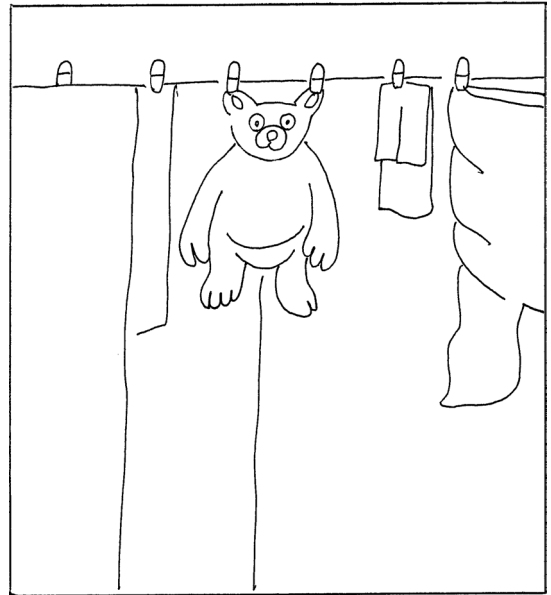


図2 物干し竿につるされた「日曜日」の構図  
(絵本の構図に基づき石川作成)

お母さんの洗濯という行為によって、物干し竿に吊るされた「日曜日」を見たこの瞬間に、男の子は、自分であるが自分ではない、自分ではないが自分でもある「日曜日」という存在を意識したのではないだろうか。ほとんど自分であるはずの「日曜日」は、自分ではないという移行対象のもう一つの特徴をもっているという理解は、移行対象と共に旅する自分の内側の世界の物語をより豊かに語る契機となると思われる。

物語の終盤は、そのような光景を見た後、「日曜日」とはじめて離れて眠る落ち着かない夜の男の子の「夢」の話であった。夢の中で「日曜日」と男の子の立場が、入れ替わった。男の子が、日曜日の家を買われていった対象物として描かれて

いた。その絵をゾーヴァは、図3-1、3-2のような構図で描いていた。

図3-1では、人間の世界で、男の子にとって「日曜日」がどのような存在であったか、図3-2ではクマの世界で、「日曜日」にとって男の子がどんな存在であったかを端的に描いていた。二つの世界は、鏡で映し出されたような生き写しの世界である。この夢により、男の子は、男の子が「日曜日」を大好きなのと同じように、「日曜日」にとっても男の子が、大好きなのだを知る。男の子はこの夢を通して、「日曜日」と自分は、気持ちを一つに出来る別の存在であるという確信を持つことができた。そして、その確信があったからこそ、具体的対象物としての「日曜日」を手放すこともできたのであろう。「日曜日」は常に自分の中に生きるもうひとりの自分でありまた、自分ではないもの、そしてその対象は常に信頼できるものとして内化され、必要があれば自分と他者の関係を読み解く第三項としていつでもイメージの中に姿を現すことが出来るようになったとも解釈できる。



図3-1 男の子と日曜日の構図  
(絵本の構図に基づき石川作成)

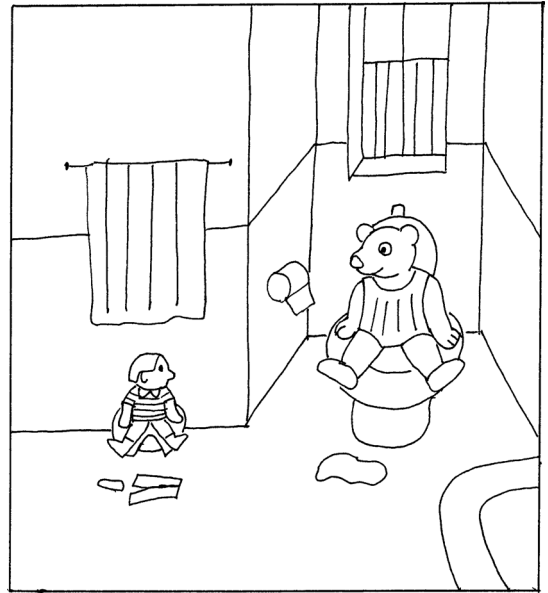


図3-2 入れ替わった構図  
(絵本の構図に基づき石川作成)

#### 4. 子どもにとっての移行対象

「よるくまクリスマスまえのよる」は、自己を意識化していく過程の渦中にいる子どもが、母親との非対称の関係性からの葛藤を乗り越えるために、移行対象とどのような関係を作りだすのかについて描き出していた。一方、「クマの名前は日曜日」では、自分と移行対象がどのような関係であったのか、という過去の視点から、子どもに移行対象がどのようなものであるかを語らせていた。つまり、自己と他者の分化が確立した子どもが、移行対象をどのようなものとして内化しているのか、について描き出していると考えられた。この2作品において、「自己－他者をつなぐ媒介物としての移行対象の位置づけの観点」、「絵本で描かれる移行対象と子どもの視点から」、という2つの観点で作品を分析的に検討してきた。ここでは、この観点での分析から検討された事柄を、子どもの育ちに関わる移行対象という観点で更に、以下の4点にまとめた。

### 1)もの言わぬ、動かない、ぬいぐるみであるということ

二つの作品とも、移行対象はクマのぬいぐるみであった。「よるくまクリスマスのまえのよる」には、「クマの名前は日曜日」の冒頭の記述のようにしゃべらない小さなくまといった描写はないが、絵本の最後のページにぬいぐるみであることがはっきりと描き出されている。しゃべらず、動かないぬいぐるみであることが、自一他が分化し始める時期からの子どもの育ちに寄り添う移行対象の重要なポイントになるようであった。

### 2)子どもと移行対象の対称的關係

どちらの作品においても、クマのぬいぐるみは、子どもに決して逆らうことがない存在として描かれていた。「よるくまクリスマスのまえのよる」では、母親と自分の関係性の中で、よるくまに自分を重ね、母親と自分との関係性の回復への願望を成就させる対象として描かれていた。「クマの名前は日曜日」では、日曜日と男の子がほとんど一心同体の存在であったことが回顧されていた。つまり、鏡に映した自分を見ているような存在として捉えられる。自分の分身として存在させるために、1)に述べた、しゃべらない、動かないといった特徴が重要なのではないかと考えられる。

### 3)関係性の中での役割交代の体験

分身のような移行対象がいること、このことは、自一他の関係性の中で、自分の役割から離れ、他者の役割を取る機会を子どもに与えることになる。よるくまに対して、男の子は、お母さんが自分に接するように接してみる。日曜日に対して男の子が、ご飯をあげたり、着替えさせたりするなど、現実の生活ではまだできないことを移行対象との間で疑似体験することが出来る。移行対象は、子どもの愛着の問題に重要な役割を果たすだけではなく、子どもの社会的な育ちを促す最近接発達領域の場を開くものでもありと考えられる。

「クマの名前は日曜日」では、男の子が夢の中でまさに社会的役割の交代をしている場面がある。ベットの中で背広をきた男の子が、小さくなった男の子のお父さんとお母さんにミルクと蜂蜜パン

を食べさせている場面がある。そして、お父さんとお母さんになにか読んでとせがまれ、自分は字が読めないと答えるのである。役割を交代してみたとき、自分という輪郭がはっきりと見える瞬間があるのではないだろうか。今の自分にできることとできないこと、少し努力すればできそうなことを理解し、現実の生活をどう生きるかを子どもなりに考えることができる。育つということは、そういう繰り返しの過程で構成されているとも言えるのだろう。

### 4)移行対象と夢の關係

現実にはうまくいかない願望が、夢の世界での移行対象との冒険において、成就する手がかりを得ることもあるし、あるいは成就して目覚めることもあるだろう。子どもにとっての眠りの世界は、現実の世界とパラレルに走るもうひとつの子ども世界でもあるのだろうか。移行対象は、現実のぬいぐるみであり、ぬいぐるみが子どもの中に内化された表象でもある。自己と他者を意識化する過程の時期を生きる子どもは、常に自分の側に立ち自分に寄り添う分身のような移行対象、あるいはほとんど自分であるが自分ではない対象の存在によって、生じる不安を乗り越えることができる。

## 5. まとめ

ここまで2冊の絵本に描かれた移行対象と子どもの物語を検討してきた。移行対象が描かれている子どもの絵本と思われるものはこの2冊以外にも多くある。大人が描く絵本になぜ多くの移行対象が描かれるのであろうか。おそらく今は大人になった我々自身が、子ども時代を想起したとき、そのような対象と出会っていた事を懐かしく思い出すだけでなく、その対象とのやりとりが子どもの育ちにとって重要であると確信しているからであろう。絵本で描かれる移行対象を分析してみると、大人が思っている移行対象の特徴というだけではなく、その中に、子どもの育ちに関わるぬいぐるみなどの文化財に込められた真の意味が紐解かれるのであろうと考える。

移行対象という概念は前述したように、ウイニ

コットによって用いられ、自己と他者の意識化過程の時期の子どもにとって母親の象徴であるという理解は、長い間、我々の常識的な知識として捉えられてきている。移行対象についてのその理解に大きな異論はないが、本研究ノートにより論じてきた観点で移行対象を捉えてみたとき、母親の象徴としての移行対象という観点にあまりとらわれなくてもいいのではないかとも思える。

それよりは、母親との葛藤あるいは文化的環境とのやりとりで生じる、子どもの様々な心理的危機に、常に子どもの側に立ち、子どもに寄り添いながら、子どもと子どもの心の旅を共にする仲間としての役割と、捉えてみてもいいのではないか。自己を分化させ、自-他関係を形成していく時期の子どもの発達を促す対象として移行対象を捉える視点が、発達研究にはあってもいいのではないかと考える。このような視座は、今後の発達研究や保育、教育に活かせる視点と考えられる。

### 引用文献

- アクセル・ハッケ、ミヒャエル・ゾーヴァ (2001) くまの名前は日曜日 岩波書店.
- 遠藤利彦(1991) 移行対象と母子間ストレス 教育心理学研究、39、234-252.
- 井原成男(2011) ウイニコットと移行対象の発達心理学 福村出版.
- 皆本麻美(2014) 心理臨床における「遊ぶこと」に関する一考察 —第三項という観点から—、京都大学大学院教育学研究科紀要、60、261-270.
- 酒井駒子(2006) よるくま クリスマスのまえのよる 白泉社.
- Winnicott, D.W.(1953) Transitional Objects and transitional phenomena: A study of the first not me possession. International Journal of Psychoanalysis, 34, 89-97.

